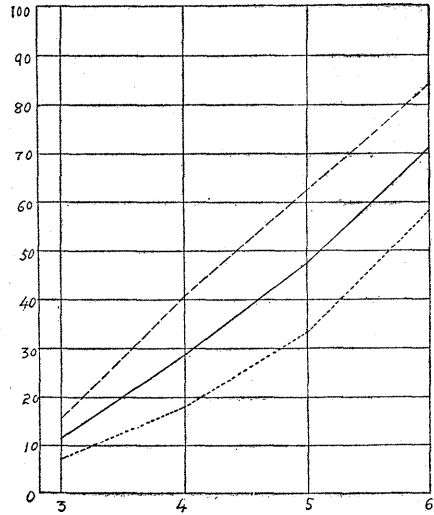


9. 紐を花結び(蝶結び)に結べる



八〇%を示すものをその年の発達規準として考えるという考え方にしたがって、各年令に発達の項目を配当することができるのであるが、これらのうち代表的な例を、全国平均によって年令別に示してみると次の通りである。

三歳のもの——ソックスをひとではく。片脚とび。

四歳のもの——ひもを片結びに結べる。片眼だけつむれる。ブランコを立ててこぐ。

五歳のもの——正方形の手本をみてかける。三角形の手本をみてかける。

六歳のもの——菱形の手本をみてかける。紐を花結びに結べる。これらの発達曲線を示すと図の通りである。(曲線のうち、実線は男女の平均、点線は男児、破線は女児を示す)

なお、全国平均について、左利きの幼児の割合をみると、三歳—八・四%、四歳—五・八%、五歳—八・〇%、六歳—四・五%、平均して六・七%であって、従来見出されている割合とほぼ同様な百分比が示されているのを見ることができた。

## 四、知的発達

村山 貞雄

### 問題の作成

幼児の知的な面の発達規準をつくるために、まず問題の作成がおこなわれた。問題は五回の試案を経て、六回目に成案した。

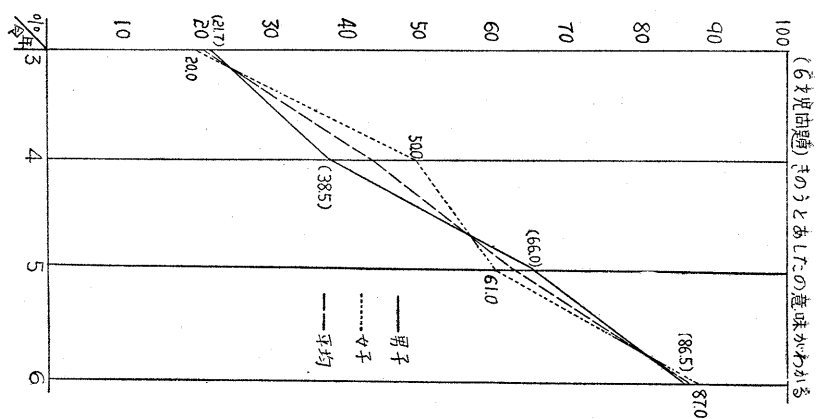
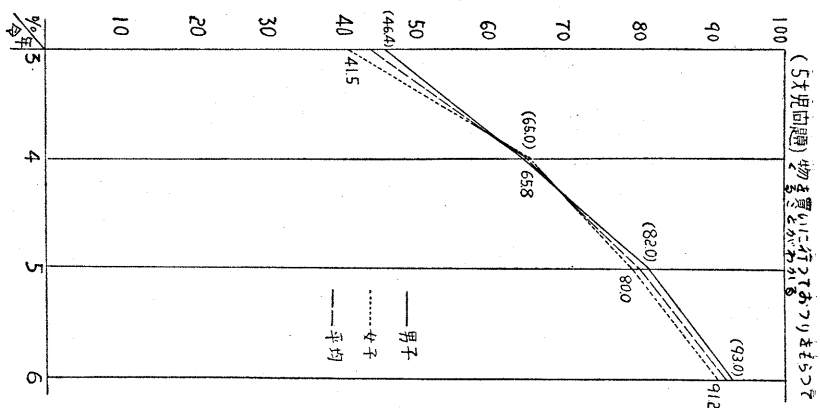
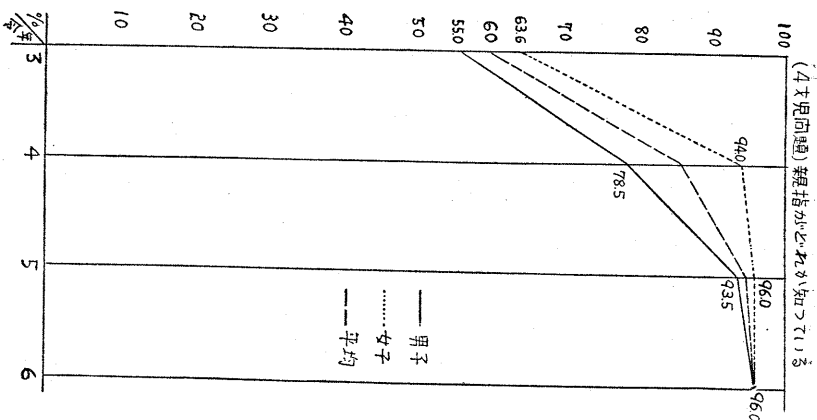
### 第一次案

第一回の試案は、知能検査の問題に似た内容で、しかも父兄に質問して分かるような内容をもって構成した。

その内容は、(1)模倣による描画、(2)数量計算、(3)絵の記憶、(4)注意力、(5)推理力よりなっている。

しかし、種々検討した結果、つぎのような内容を考えて、これは知的問題作成の今後の大綱とした。

一、問題は、狭義の知能に限定せず、知的な面の発達をみるものをもって構成すること。すなわち、知識、常識などで、知能と関係の深いものを含む。



二、調査のために、いわゆるテスト用具のいらないもの。

三、父兄が、その場で児童に質問したり、おこなわせてみたりしてもよいが、なるべく父兄が日常の観察結果によって直ちに正確に答えられるもの。

以上の方針にしたがって、第二次案を作成した。

#### 第二次案

第二次案は、(一)読むこと、(二)書くこと、(三)計算すること、(四)常識(五)記憶、の五項目からなっている。

第二次案を、東京都内の約二十名の幼児について調査をころもみた。その結果、問題の難易や調査法の難易などを考慮して第三次案を作成した。

#### 第三次案

第三次案になって、はじめて最終案に似たものになったが、第三次案は、四十二個の問題よりなっている。

そのうちわけは、(1)読むこと(四問)、(2)書くこと(六問)、(3)数えること(四問)、(4)数に関する常識(七問)、(5)自我意識についての常識(六問)、(6)学習的な面における常識(四問)、(7)生活上の常識(四問)、(8)記憶(五問)、(9)思索(二問)である。

解答欄は、大部分が読める、読めないとか、指せる、指せないというように印刷してその一方を丸でかこませるようにした。

なお、四十二の質問のうち八つが調査するときに、絵などを持って行って実際にやらせてみるものであった。

#### 第四次案

第四次案では、第三次案を四十五問としたほか、内容を若干変更

した。また項目のわくをはずして、調査者が質問をしやすい順序に変え、文章の調査のときの質問の口調に変えた。たとえば、第三次案では「かなで書かれた自分の姓名が読めるか」とあったのを、「かなで書かれた自分の名前が読めますか」というように変え、第三次案では「十円硬貨をみせて、これ何円? とたずねると正しく答えられるか」とあったのを、第四次案では、その前に「一円さつをみせて「これ何円? とたずねると正しく答えられますか」という質問があるの、十円だまはどうですか」というように変更した。

解答欄は「+」と「-」の三つに分けて、そのうちの一つの記号を○でかこませるようにした。ただし「数をいくつまでかぞえられますか」というような内容の、五個の質問は、父兄ができるかと答えればあい、すなわち+の場合には、できる数を書きこむようにした。

なお被調査者の条件欄をつけた。

#### 第五次案

第五次案は、第四次案と形式においてはほとんど変わらないが、ただ第四次案の問題内容を若干変更したものである。ただし、できた数を書きこむ問題は、すべて一番終りにまとめ、また「住所が言えますか」という問題を一番終りに持って来て、言える場合に、言える内容を書きこむようにした。結局第五次案に少しの修正をしたものが成案となった。

なお第五次案では、「知的問題調査の要領」といって、調査者のための調査の手引きをつけた。

#### 調査用紙

調査用紙は、この調査全体の調査用紙から切りはなし、(V)とし

て、上部に調査者のために調査する場合の注意を書き、その下に、問題を印刷した。この調査用紙の裏面には、知的発達とおなじ調査方法をとった。運動機能に関する質問の一部分、六問が、その記入上の注意とともに印刷された。

#### 知的問題の調査法

知的問題の調査法は、他の部門と多少ことになっている。すなわち、運動機能の一部をのぞく他の部門では、あらかじめ置かれた調査用紙について父兄に記入してもらっておき、しばらくして調査用紙をとりに行く方法がとられたが、知的問題では、調査者が第一回目におとずれるときは、調査用紙を全然おかず、第二回目におとずれたときに、調査用紙を自分で話す口調で読みながら、調査者自身がプラス、マイナス、のいずれかを丸でかこんでゆく方法をとった。

このような方法は調査法全体を面倒にするものではあったが、知的問題の特質から、練習効果があるので、父兄が練習をすることを防ごうとした結果である。たとえば、第九問の「片方の手に指が何本あるかを見ないで言えますか」という質問の場合、もし、この調査用紙をおいておいて、父兄に記入させると、父兄が、「このようなことが重大なのだな」と思って子どもに練習させる結果、正しい得点がでないことをおそれたためである。

#### 調査結果の整理

調査結果は、東京地方と全国とに分け、全国については、北海道、東北、関東、北陸、東山、東海、近畿、中国、四国、九州の地区別にして男女別に、三歳、四歳、五歳、六歳の四つに分けて、各問題ごとに通過率の統計をとった。また男女計について同様の統計をと

り、更に、全国について統計をとった。

このほか、たとえば、「指で物を指しながら数えると、いくつぐらいまで数えられますか」という質問のように知的発達の問題には、調査者が、<sup>プラス</sup>の場合に数を書きこむようになった質問があったが、これらの質問については、三歳、四歳、五歳、六歳の各年齢について、数値の通過率をしらべた。

#### 通過率

通過率は、情緒や社会性の通過率の上昇が非常に緩慢であるのにくらべて、全部きわめて急激に上昇している。これは、運動機能の発達とともに知的発達の特徴であると推測された。

そのうち、二、三の例を示すと前表のようになる。

## 五、情緒的発達

松村 康平

情緒的発達は、先に示してある調査問題及びその結果の本研究における整理方法をもってしては、それをとらえることがむずかしい。情緒的反応が、場面に規定されやすいこと、評価の規準が動揺し易いこと、現象型（見た目にそれとすぐわかる行動の型）が同じようであってもその条件発生的な型は違っているといったことが、情緒的反応に関しては、他の場合にくらべて著しいこと、現象